

# 「海嶺」

(三浦綾子全集 第十巻 主婦の友社)

「海嶺」は百科辞典によれば、「大洋底に聳える山脈状の高まり」をさすが、ほとんど人目にふれない私達庶民の生き様、そのもの。大海の底には厳然と聳える山が静まりかえっているように、岩吉も音吉も久吉も、それぞれに海嶺であり、人目にふれなくても自分の生を見事に生きた人生であり、しかもその結果として、自分自身は知らずに、この日本の歴史に大きな関わりを持っていた。モリソン号事件が日本の歴史に与えた影響を思い浮かべながら、祖国を恋いつつ、異国に生き、人知れず死んだ彼らの歩みを一編の歴史口マンにまとめた。(歴史小説)

鎖国下の日本では漂流民が文化交流史で大きな役割を果たしたことは知られているが、尾張出身の岩吉、音吉、久吉の三人が、マカオでイギリス人宣教師を助けて、最初の日本語訳聖書をつくったのもその一つである。

彼らは尾張の小野浦の船乗りで、江戸へ荷物を運ぶ船頭重右衛門の千石船・宝順丸に乗って、天保3年(1832)秋、熱田を出港したが、遠州灘で暴風雨にあい、帆も舵も失って漂流したあげく、1年2ヶ月もかかってカナダ海岸の英国領コロンビアに位置するフラッター岬に流れ着いた。

三人のうち音吉は、知多半島の小野浦で、千石船の水主(かこ)だった正直者の武右衛門の子として生まれ、12歳の時、宝順丸の船主・樋口源六に雇われたが、その利発ぶりをみこまれて、将来は源六の孫娘・琴の婿にと望まれていた。その親友の久吉はお陰参りで抜け出したおり、遊び人ふうの男にからまれて、川へ投げ込まれようとしたのを岩吉が助けてくれたことがあった。舵取りの岩吉は、一度は舟を下りて、熱田に住む妻のもとで暮らしていたが、重右衛門にとくに頼まれて乗船したのだった。

14人の乗組員は漂流する間に、音吉の兄の吉治郎や船頭の重右衛門をはじめ、つぎつぎに倒れ、水主頭(かこがしら)の仁右衛門が上陸直前に死んだのを含めて11人が犠牲となり、すぐれた気力をもつ岩吉と二人だけが生き残った。

だが、三人は、インディアンの奴隷となり、みじめな日々を送らなければならなかった。彼らは牛馬のように鞭打たれながら働かされたが、中でも酋長の弟は虻のような男であり、その妻が岩吉に好意をしめしたため、岩吉の生命がねらわれるという危険もおこった。岩吉は、救出をたのむ手紙を日本文でしたため、それが巡り巡ってハドソン湾会社社員の手になり、彼らに対して救いの手がのべられたのだ。

こうして三人は英国領カナダの統治権を握るハドソン湾会社の船でフォート・バンクーバーへ送られ、「オレゴンの父」と呼ばれるマクラフリン博士と出会い、三人が帰国できるよう、博士が努力してくれたことを知る。そして今度はイギリス軍艦イーグル号で、サンドイッチ諸島(ハワイ)を経て南アメリカのホーン岬をまわり、ロンドンへ着いた。

ロンドンでは14日間滞在し、商船のゼネラル・パーマー号でマカオへ送られるが、かねて聖書を日本語に訳したいと思っていたギュツラフ牧師の家に預けられたことから、牧師の仕事に協力することになる。彼らはここで肥後出身の4人の漂流民と合流し、最後に

アメリカの商船モリソン号で日本の近海まで送られ、5年ぶりで日本の国土を間近にしたが、幕府は彼らを受け入れようとせず、江戸湾でも鹿児島湾でも砲撃したため、ついに帰国の夢は果たされなかったのだ。

この間、彼らは激しい望郷の思いにかられながらも、初めて出会う異国の人々や、その社会のあり方に眼を開かれ、彼らに寄せられた多くの好意を通して、人間は誰しも同じだとさとする。当時、キリシタンの禁教令が敷かれ、その弾圧を恐れてキリスト教とは一切関わりを持つまいとしてきた庶民達だが、運命の歯車に巻き込まれてやむなく、多くの事実を知ってしまった3人が、日本の神仏への素朴な信仰を持っていただけに、それとは全く異質的な神の存在をどう受け止めたらよいか、迷うばかりだった。国へ帰りた一心の彼らの内心で、自分たちの意志とは関係なく、問いかけずにはいられないその問題の重さを、作者はこの小説で代わって問いかけようとしているのではないか。

琴が御用提灯を壊した時、音吉がかばう。

琴の祖父「源六」の言葉

「大事なものと知っていてこわしたのは、まさか、こわしたくてこわしたのではあるまい。こわすまい、こわすまいと、音吉のことや、大事な扱っていたんやろ。だが、いくら気をつけても、人間、失敗ということはある。そんなことがわしにもようあった。」

源六は穏やかな語調でそう言った。小さな過失は咎めても、大きな過失は咎めまい、というのが源六の信条であった。大きな過失は、既に本人が悔いていることを、何十年も船頭として人を使ってきた源六には、よくわかっていたからである。

ゼネラル・パーマー号の船上での礼拝

フェニホフ牧師の「罪深い女（姦淫の女）を赦す（ルカ 7:36 - 50）」話を聞いて

姦淫の女は石で打ち殺せという掟。イエス様に答えを要求

皆さんなら、ここで何と答えますか？ 女を許すと言いますか、殺すと言いますか。

岩吉：（野郎も殺すべきだ！）と思う

牧師：「男共は息をのんでジーザスの答えを待っていました。もし、掟の通り、女を石で打ち殺せと答えるなら、「ではジーザスよ、あんたが日頃人の罪を許せと言っていることはどうなるんだ。あんたは言ったろう。人の罪は七度ではなく、その70倍、つまり490回許さねばならんと言った。要するに、無限に許せということだろう。そのあんたの教えはどうなるのだ」と、難癖をつけるつもりでした。もしジーザスが、女を許しなさいと言え、「みんな聞いたか、このジーザスという奴は、神聖な掟をふみにじる男だ」と、みんなを扇動しようと思っていたのです。どう答えても、ジーザスを訴えることができると、ちゃんと計算して、男共はやってきたのです。あなた達がジーザスなら、どうしますか。」

「困りましたねえ。男共はジーザスを罠に陥れようとして、やってきたのです。しかしジーザスは、彼らの心を見透かしていました。ジーザスは不思議な方です。相手がどんな気持ちで自分にものを言っているのか、すべて見抜いていた人でした。それは聖書を読めば分かります。この時、ジーザスは、何も答えずに、身を屈めて、地面に指で何かを書いていました。絵を描いていたか、字を書いていたか、それは分かりません。その時、ジーザスがどんな気持ちであったか、それも私達人間には分かりません。男共は、ジーザスが

答えられないと甘くみたのでしょう。ますます居丈高になって返答を迫りました。ジーザスは静かに身を起こして、彼らに言われました。これがかの有名な言葉です。

「汝らのうち罪なま者、先ず石を投げ打て。」

罪の問題 「罪とは？」との質問に対して（罪が分からない人に） みな罪人  
平等 - すべての人は平等（みな罪人）

「汝らのうち罪なま者、先ず石を投げ打て。」ジーザスはこう言うと、また身を屈めて、地面にもものを書き続けられたのです。もしこの場にあなたがいたとしたら、どうしますか。この女に石を投げ打ちますか。罪のない者が石を投げなさいと言ったのです。男共はこそこそと一人去り、二人去り、みんな行ってしまいました。罪のない者は一人もありません。」  
「人間である限り、すべて罪人です。罪のない者はありません。この私はむろんのこと、金持ちも貧しい者も、貴族も平民も、皇帝も、すべて罪人です。どこの国の民もどこの国の王も、人間である限りすべて罪人です。誰も石を投げ打つ資格はありません。ジーザスはこの男共にだけこう言われたのではありません。世界の全ての人に言われたのです。即ち、あなた方一人一人にも言われたのです。」

岩吉：（大変な教えやな。信じない方が楽かも知れせん）

音吉たち、ギュツラフの聖書翻訳（和訳）を手伝う

「初めに言があった」（ヨハネ福音書 1：1）

In the beginning was the Word.

ハジマリニ

Word（ロゴス） 神の理性、真理

音吉たちが、Word（ロゴス）の意味が分からないので、説明

ギュツラフ：「それは天地を造り出す力でもありますし、善意を判断する知恵でもありません。すべてのものを存在させている秩序でもあります。それらすべてを合わせたもの、それがここでいう Word なのです。」

ロゴスは、言葉、神の理性、秩序、真理の判断者、そして創造力、それらすべてを含む深遠な意味を持つ、ギリシャ語であった。

善悪を判断する知恵 「カシコイモノ」 was 「ござる」

ヨハネによる福音書

「ヨハネスタヨリ ヨロコビ

ハジマリニ カシコイモノ ゴザル。 コノカシコイモノ ゴクラクトモニゴザル。

コノカシコイモノワゴクラク。 ハジマリニコノカシコイモノ ゴクラクトモニゴザル。」

1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は、初めに神と共にあった。